

中央大学理工学部電気・電子工学科

同窓會々誌



(撮影 30年卒 大越氏「御坂峠」にて)

1993-10

30号

中央大学校歌

石川道雄 作詞
坂本良隆 作曲

一、 草のみどりに風薫る

丘に目映まばゆき白門を

慕あこがい集へる若人が

真理まことの道にはげみつゝ

栄ある歴史を承け伝う

あゝあゝ中央、我等が中央

中央の名よ光あれ

二、 よしや嵐は荒ふとも

揺がぬ意気ぞいや昂たかく

春の驕おご奢の花ならで

みのりの秋やめざすらむ

学びの園こそ豊かなれ

あゝあゝ中央、我等が中央

中央の名よ誉あれ

三、 いざ起て友よ時は今

新しき世のあさほらけ

胸に血潮の高鳴りや

湧く歌声も晴れやかに

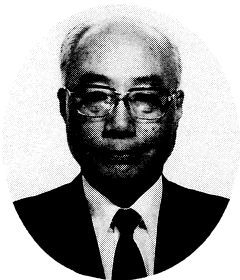
自由の天地ぞ展けゆく

あゝあゝ中央、我等が中央

中央の名よ栄あれ

目 次

中央大学校歌	2
会長あいさつ	会長 長 青木 義雄 4
変革の季節	主任教授 遠藤 正雄 5
余暇利用実行報告	昭29年卒 木野村秀夫 6
地中線技術屋になって思うこと	昭39年卒 本荘 一実 7
自然と「自然科学論」を見直そう！	昭39年卒 菱沼 一夫 8
二子山部屋と中野新橋	昭41年卒 戸川 英明 9
一休洗心	昭41年卒 赤岡 岱 10
「ひらきなおり」	昭42年卒 萩野 征治 10
初 体 験	昭47年卒 菅原 正人 11
光 と 影	昭61年卒 野口 皇紀 12
〃とある音楽ファンのなげき、	平 2 年卒 細田 浩希 12
いま想うこと	深井 昌 13
会務雑感	天野 浩志 14
第 1 回合同幹事会開催される	15
常任幹事紹介	15
写真紹介	15
新会員紹介	18
平成 3 年度会計報告	18
入会申込書 編集後記	19
平成 5 年度 総会・懇親会のお知らせ	20



ごあいさつ

会長 青木 義雄

同窓会会員の皆様にはますますご健勝のことと存じ上げます。

私は昨年11月3日に開催されました同窓会総会におきまして、堀中前会長の後を受けて会長の大役をおおせつかりました。

微力ではございますが、諸先輩の方々が築き上げた伝統を守り、同窓会のますますの発展のために努力いたす所存でございます。どうか皆様のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

中央大学理工学部電気・電子工学科の卒業生は本年3月の卒業生212名を加えて7,084名となりました。また本年4月には195名が入学いたしました。

大学では昨年4月から理工学部新たに情報工学科が発足いたしました。これによりまして、8学科（数学科、物理学科、土木工学科、精密機械工学科、電気・電子工学科、応用化学科、管理工学科、情報工学科）となりました。情報工学科の主任教授には古屋清先生が就任されました。

また、本年3月には吉久信幸先生が定年をお迎えになり、去る1月9日に理工学部校舎5534号教室において、最終講義がありました。演題は「中央大学の伝統」でした。先生は「中央大学の伝統は質実剛健の精神と家族的情味であり、これからの日本人に一番必要なことは思いやりの心、すなわち家族的情味であり、愛が大切である。それから日本の工業の原料は90%以上輸入しているが、それらの原料は地球に無尽蔵にあるわけではない。物を大切にする精神も日本人の良い

伝統であった。質実剛健の精神をよくかみ締めて、地球を大切にしたいものです。」と述べられました。――

吉久先生は昭和23年に中央工業専門学校講師となり、昭和24年中央大学助教授、昭和34年中央大学教授となり、電気磁気学、電気音響工学等数多くの科目を担当されますとともに昭和20年には文部大臣賞を受賞されております。45年間の永きにわたり私共にご教授をいただきました。吉久先生に心からお礼を申し上げますとともに、ご健勝をお祈りいたします。

同窓会では、本年度は会則の改正に取り組みます。現行の会則は昭和59年9月1日から改正実施されておりますが、その後学科名が電気・電子工学科になったこと等により、改正する必要が生じたためであります。

また、同窓会々誌は今回で第30号になりました。会員の皆様に大学の近況をお知らせするとともに、皆様の近況などを写真入りで掲載していきたいと思っております。奮って投稿して下さるようお願いいたします。お待ちしております。

また、本年は同窓会総会を来る10月30日(土)15時から原宿駅前の「南国酒家」で開催いたします。総会終了後は同じ場所で食事をしながら懇親会をいたします。ご家族同伴でのご出席もできます。皆様のご出席をお願いいたします。

終わりに皆様のますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

(昭和32年卒)

変革の季節

政治・行政・教育などなど、世はまさに変革の季節です。勿論、皆様の職場でも改革が行われてきていると存じますが、大学もまた文部省の大学設置基準の改正に対応して、カリキュラムを中心とした教育プログラムの大幅見直しと、教員の自己点検・評価の実施組織作りが進行中です。

教員の自己点検・評価というのは、学校の教育効果評価しようというもので、教員の教育内容と方法が問われることとなります。一方受講者の努力と表裏一体であることもまた当然です。授業風景や教授会風景を書いた出版物もあって、およそ、想像はつくと思います。しかし、現在の大学教育のより本質的な問題はパンフ JUAA No.9、'93（大学基準協会発行）にあるように大学入学＝卒業証書＝就職という暗黙の了解のもとで行なわれている教師と学生の狸れ合いから生れているものであり、この構図は教師にとっても学生にとっても極めて居心地のよいものであることも確かです。このような構図は日本経済の発展と共に醸成されてきたようで、世の中が不況になるにしたがって先ず卒業＝就職という構図は必ずしも成り立たなくなってきた、というのが今年度の実感です。そして、大学入学＝卒業証書という構図には、学力が前提とならなければならぬ、ということに気づきつつあるようです。我々も学生も大学の社会的責任は、学生の学力の充実にあることを改めて自覚し、道は遠くとも一層の努力をしなければなりません。

さて、話は変って、卒業生の多くの方々から、定年退職・転職等の挨拶状を頂戴します。昭和30年前後の就職難の時代に社会に出られ、現在の日本経済の繁栄を築く（electro-）motive forceとして活躍してこられた皆様には心より敬意を表する次第です。時代的役割を果たしたという自負に満足しておられる事と思っておりますが、今までに培^{つちか}ってこられた経験を生かして、現代社会に欠けているものを充足すべく、或いは今まで

遠藤 正雄（電気・電子工学科主任教授）

できなかったことの実現に、第二の人生を捧げて頂きたいと思います。また、それぞれの分野で主要ポストに就かれ、活躍中の皆様には、益々の御健勝をお願い申し上げる次第です。

不況の波と共に学生の就職が思うにまかせなくなってきた現在、先輩諸兄には格別の御好意を頂き、多くの学生が就職することができましたことを紙面をおかりし厚く御礼申し上げます。これからの学生の就職には、先輩諸兄のお力添が、益々必要になってくることは言うまでもありません。同窓会活動が、より発展し、更に大学教育をバックアップして頂くことを期待いたします。

電気・電子工学科では、この3月吉久先生が定年退職されました。永年にわたる教育活動に敬意を表すると共に、私共に寄せられた御厚情に深謝申し上げますの次第です。

私事ではありますが、今年で還暦を迎えます。あらゆる人にとって時間が等速で経過する以上、万人にとって還暦は一つの通過点なのだと思念しています。最後に1988・12・18朝日新聞天声人語よりの抜粋を掲載し筆を置くことにします。

「忙中閑有り／苦中楽有り／死中活有り／壺（コ）中天有り／意中人有り／腹中書有り、の六つをあわせて六中観と呼ぶそうだ。忙がしい時こそ暇を、苦しいからこそ楽しさを、見いだす。死中に活を求めてという言葉があるが、活路は必ずあるものだ。壺中の天、というのは、おのれの生活の中に独自の天地を持つこと。仕事以外の趣味もこれにはいるだろう。くだらない男や女を頭の中に置くより、意中にりっぱな人、すぐれた人を持つしあわせ。ふだん何を愛読しているかもだいじなことである。」

還暦を迎えた我々にとっては、壺中天有り、とでもまいりましょうか。現在活躍中の方々には六中観のどれかに思を致し、頑張っ頂きたいものと祈願しています。

（'93・8・15 終戦記念日記）

— 余暇利用実行報告 —

昭和29年卒 木野村 秀 夫

50才を過ぎてから始めた山歩きも早や14年、本州、北海道を中心に2~3000 m級の山を周到な準備をしたうえ、年1回挑戦している。今流行の中高年登山とは一味違った貴重な体験をさせて貰い、眼下の雲海、360度の景観、風雪に耐えているガレ場の岩石の一つ一つ、可憐な高山植物、雷鳥の親子等を通じて大自然は多くの事を私に教えてくれる。有難い事である。

無理のない計画、ムラのない行動、そして時には無駄と思われる余裕も必要であるが、周知の鉄則だけは守らないと時には生念にかかわる恐ろしさ、厳しさをも持っている山々である。(経験済み)

そして月1回の科学ゼミナール(出)、コンピューターカルチャー(平日夜間)に、生れ育った東京に上京し時には、帰路東京の夜も楽しみながら夜11時頃帰宅と相成るし、年と共に下手になった月1回のゴルフ、月毎に変わる県立美術館の作品、地域社会での週1回のザル囲碁も欠かさないよう努めている。

高校教師の誘いも辞退し、今年は知人から貰った厚

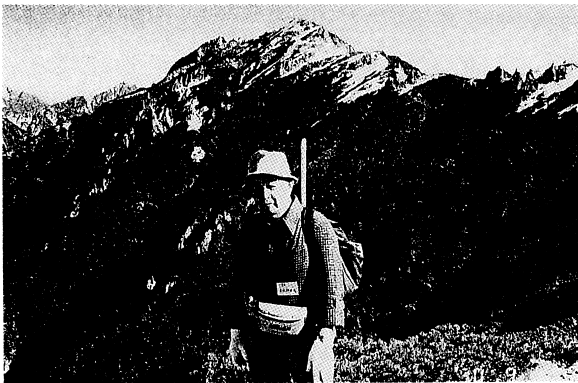


極楽平標識前の筆者、遠くに八つ岳、
かすかに富士山、そして北岳、仙丈岳、
甲斐駒ヶ岳(南アルプス)が続く。

平成3年夏

物の菊が、昨年より大輪になりそうなので楽しみに毎朝葉っぱをさすように眺めている。男の料理教室にも参加してみた。時間と材料と心の余裕があれば楽しいものである。そして仕事では月400件に及ぶ保険と賠償業務をパートの協力を得て、お客様対応から物の発送依頼、賠償金の受領迄、忙がしく担当させて貰って、時には超勤の連続である。

残り少ない人生を休養をとりながら、牛歩の山登りの如く、私なりにマイペースで精一杯楽しんでいる毎日である。色即是空、ただ一度の人生だもの。若い人には可能性がある夢がある。終生夢を持って仕事にも、余暇にも、家庭にも、自分自身の人生を大いに実りあるものにして裕しいと願うものである。



(北アルプス燕岳を背に立つ筆者)

平成2年夏

地中線技術屋になって思うこと

昭和39年卒 本 荘 一 実

近年マスコミ情報で「電線類の地中化」とか「ケーブルシステム」とか「自治体管路方式」という文字に目をとめられている方も多いのではないかと思えます。

振り返って、昭和39年、電気工学科の卒業に際し、どんな職業を選ぶべきか模索し、何となく建物の中で机に座って過ごす仕事は性に合わないのと、ヘルメット姿に憧れもあり、現在の㈱関電工に入社させてもらって以来30年目になってしまっています。

入社時には、ビルの屋内電気設備工事を担当する部門への配属を望んだが、思惑が外れ地中送電線設備工事をやる部門にまわされ、数ヶ月は退社も考えたりして思い悩んだりしました。しかし、だんだんこの分野の奥深さ、将来性を知るにつれ、興味が増し、以来㈱関電工の地中送・配電線部門、一筋にやってきて、多くの経験と勉強をさせていただきました。

当時の日本は、高度成長期に入りつつある時代であったが、電力系統設備で地中線による送・配電線路は限られたものであり、今から考えると、技術、技能、設備機器も、オイル、ゴム絶縁が主流で省力機械化工法の模索時代であったが、その後の地中ケーブル、関連機器、工法の技術開発は目ざましく、絶縁材のオイルレス化、高電圧・大容量化、機器のコンパクト化、工法のプレハブ化、自動化が進み、現在では電力需要の増大と相まって、都心部への基幹系統線路に50万Vの地中送電線路が実用化されようとしており、高低圧配電線網の地中化率は、都区内で36.5%（H3年末）までになってきています。

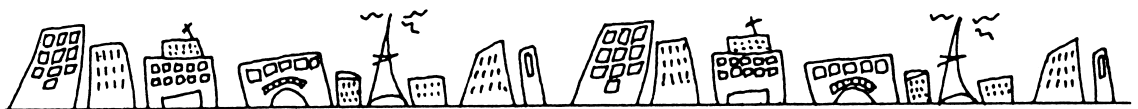
特に昭和60年10月以降、行政省庁も経済政策との関連で電線類の地中化に関心を高め、第一次地中化計画（H2年までの5年間で1,000km）に次いで第二次地中化計画（H7年までに1,000km）と地域社会のニーズ、都市再開発に関連しての社会資本整備を背景に電力会社への要請を強め、一段とピッチが上ってきており、関係業界としても技術開発、施工体制強化に努めています。

この地中化計画の推進に当たっては、対象地域の選定、その設備方式、費用負担方法、法規制適用等、懸案事項も多いが、無電柱化された安全で快適な都市景観は、その地域活性化にもつながることから、電線類の地中化は社会的コンセンサスがしっかり固まってしまった感があり、将来的にも働き甲斐のある分野と思います。

一般的に都市部での地中送配電設備工事というと、夜間工事とか土木的要素の仕事としての印象が先にたち、電気系の若い学生諸君には魅力を感じにくい分野かもしれないが、電気工学という技術をベースに、都市部での電力系統設備を安全で快適な都市景観作りに調和させていくという仕事は、技術開発の面でも、将来性の面でも、男一生を賭けてみるに値すると思いますので、フレッシュで柔軟な発想の技術者、多数の参入を期待しています。

おわりに皆様方のますますのご活躍を心からお祈りしています。

〔㈱関電工配電本部地中配電線部部长(工事管理担当)〕



“自然”と「自然科学論」を見直そう！

昭和39年卒 菱 沼 一 夫

我々は、機械や装置を使っていろいろな操作をして物を作ってる。

「今日は、調子がよかった」とか「今日は雨のせい
か調子が悪い」等と言われたり、テレビ等の家庭電化
製品の調子の良し、悪しをこれは「当たった」とか、こ
れは「外れた」等と言う言葉が生活の中でよく交わさ
れる。

あたかも、機械や装置が意志を持っているような擬
人的である。

これらの会話の素材を“自然の理解”で解釈してみ
ると、「調子がよかった」・「調子が悪い」・「当たった」
・「外れた」等は、全て「自然現象」として捕らえるこ
とができるが、日常（社会科学の社会）では、冒頭の
解釈が“標準的”となって、今日の社会を支配し始め
ているとも言える。

“標準的”な解釈の「増幅」は、生活の豊かさ、「製
品」等の物の豊富さと連動しているようだ。

大昔の人達が自然と闘って、自然の原理を手探りで
追及し、その「周期性」を見いだしたものがリーダー
として一族の生活を支えることができたし、更に、人
間社会が組織化されてくると、思想、宗教にいたるリ
ダーシップとるに至る精神活動が活発に行われていた。

現代は更に「自然科学論」を技術展開することによ
って、「人類のみの生活は非常に豊か」になった。

“今の日本人”は苦勞しなくても“楽しい生活”が満
たされるようになってきて、先人の培ってくれた自然
現象の理解をないがしろにし始めていないだろうか。

自然科学的な考え方の衰退が、生活の豊かさとは反比
例して仕方ないとする仮説に基づいて、自然科学的な
思慮が定着しにくい、状況を考察してみたい。

まず思い浮かぶのは、日本の近代文化の始まりと歴
史が、欧米の模倣に始まり、「追いつきよ」「追い越せ」
であったことは否めない。

そして、この経緯が、工業力の発展と世界に希に見

る経済大国になった。

次には、教育体系を上げることができる。

“応用学”を中心にした教育体系は「基礎学」である
自然科学を“なおざり”したきらいがあり成果至上主
義になったと言える。

結果として、“短絡的展開”となり、社会の風潮は、
「人气的」であったり、「非理論的」な“論理”がまか
り通るようになる。

先日、ヨーロッパのある科学史家（残念ながら名を
止め損なった）が、近代科学論の元祖と言われるガリ
レオやケプラーを科学文化の発展の「非功績者」とし
ての論評を耳にした。

「彼らの非功績的な面は、数学や科学を特定の知識
階級の人達の文化（アカデミック化）にしてしまい大
衆化しなかったことである」と言うものであった。

このコメントを前提に、当時の様子を伺って見ると
当時の権力者は、宗教論（とは言っても基本は自然の
理解の特別な展開）を基に民を制していた訳で、地球
が中心で宇宙が動いていると言う基本を覆して、太陽
を中心と宇宙論を展開した訳ですから、当時の社会で
は、取り分け権力者は「革命的な理論」の展開には、
大変な動揺と抑制が働いたものと推定される。

同時に新しい見識を披瀝する人達は特別のグルー
でないとはできなかったのかも知れないし、科学者の生
活基盤が権力者によって支えられていた状況も理解す
る必要があるようだ。

この「論評」は、今日の自然科学、工学に携わって
いる我々一人一人に対するクレームと受け止める必要
がありそうだ。

自分たちの置かれた今日の状況は、彼らよりも遙か
に“自由”な状況と考えられるが、この状況に則した、
“もっと大きな行動”に努力しているだろうか。

今日の“状況”が時の流れと共に何が変わってきて
いるのか、自然に対する理解は成就しつつあるのか。

人間の“思惑”は自然現象を乗り越えることができるのか。

大宇宙に存在する我々の存在も、これまた自然そのものであります。

我々に、生物と言う生命の自然現象を代表できる「人間」の尊厳があるとしたら、自然現象を素直に、謙虚に理解することにあるのではないだろうか？

自然現象の「理解の頂点」は宇宙の創成、我々の存在の理解そのものであると言われているが、大きな風呂敷を広げる必要はありません。

一杯の水が体内に取り込めるのも、地球の引力のお陰です。

身近な一つ一つの事柄を自然現象として謙虚に捕らえ、理解しあうことは、自然界に自己の存在、意義を

自覚するそのものです。

仕事の苦勞、個々の私生活との関係がどんどん離れたり、別物のようになりつつあります。真に、不幸の始まりです。

自然の理解と自然科学論を展開しましょう。

豊かになって起こっている環境破壊、自然保護、“思惑”社会の“なれの果て”とも言える、日本列島一つの値段で、北米大陸が四つも買ってしまうと言うとんでもない地価の高騰を招いた「バブル経済」、「金権体質」や「権力志向」等の今日の課題も、“自然への心配り”で改善できると信じます。人の“感情”も自然現象の一つです。

(味の素 欄)

二子山部屋と中野新橋

今年からJリーグが幕を開け、プロスポーツも野球、相撲、ゴルフ等に加え、サッカーが加わり、増々華やかになり、TV、スポーツ紙を賑わわせている。今年の話はサッカーに一步ゆずるものの、ここ数年の大相撲の人気は凄まじい。特に若・貴人気は、やや落ちて来たとは言え、一大ブームを築いた。

藤島部屋と中野新橋；元大関貴ノ花が中野新橋に藤島部屋を開設した時のことは意識に無かったが、若・貴が入門した時はTVでも報道され、我町の部屋、力士を意識した。その後二人は順調に出世をし、やがてブームになり、二人はアイドルとなった。一挙一動が報道されるようになり、中野新橋の商店街に「がんばれ藤島部屋」の横断幕も出るようになり、大いに盛りを見せるようになった。

貴花田初優勝；この時は凄かった、数百メートルの中野新橋通りに実に3万8千人のファンが押しかけた。うどん、ビール等の無料サービス、「祝優勝貴花田関」

昭和41年卒 戸川英明

の横断幕等大変なものだった。この時が最高の盛りだった。

その後貴花田は二度の優勝、最年少大関、宮沢リエとのこと、二代目貴ノ花襲名等二十才にして凄い経験を積んだものと感心する。

一方、若花田もこちらは三代目若ノ花を襲名し、初優勝も飾り、大関にも昇進し、史上初の兄弟同時大関が誕生した。藤島部屋も名跡交換により二子山部屋となった。これからは兄弟による熾烈な優勝争い、綱取りが展開されるであろう。

日頃リストラを中心とした仕事の話、政治改革、民族紛争、貿易摩擦等々、気の休まらない環境の中で、唯一我町のプロスポーツ団体である二子山部屋、人気者若・貴により、中野新橋の町は安らぎを得ることが出来る。本人達は必死だろうが。

(旭光学工業 欄)

一休洗心

昨年10月吉日、教師生活25周年を記念して、無病息災で無事に過ごせた日々感謝するつもりで、秩父札所の六寺を巡拝した。勿論、「現世の幸を求め、救いを求める」と言った宗教染みたものではなく、ごく気楽な思いつきで、電車で飛び乗った。秩父駅から、そう遠くない寺を徒歩で回った。ご存じかと思いますが、秩父34ヶ所の観音霊場は、文暦元年(1234年)に開創され、室町時代末期には札所があり、江戸時代になると庶民の心の支えとして流布し、隆盛をみるようになったそうである。駅周辺は開け、モダンな建物、人で賑あう商店、コンビニエンスさえある普通の街並だが、ひとたび奥に入ると、木々草花が茂り、田畑に稲や野菜、茅葺きの納屋、静寂な山村、澄んだ空気そしてそれ等に似合う赤トンボ、さらに耳もとにやさしく小鳥の囀り…懐かしい自然の姿や営があった。最初に21番所の要光山観音寺に立ち寄った。この寺は真言宗で聖観世音菩薩が祭られ、芭蕉句碑と弁財天の石塔があった。農家と間違ふような特徴のない札所だった。田舎道を1.5キロ程歩くと二十二番所の華台童子寺、茅葺き屋根の仁王門に入ると、梅並木、畑に囲まれた中に装飾技巧の粋を集めた童子堂が非常に素朴な姿で建っている。ちょうど昼時、寺を守る老夫婦からのお茶と沢庵、梅干でにぎり飯を頬張った。10月の太陽とは思

「ひらきなおり」

近頃、「総労働時間短縮」、「余暇の使い方」、「定年退職後の身の処し方」等々の言葉が氾濫していますが、これらの言葉を聞くと私はどうも肩身が狭くなってしまう。そうです私は典型的な日本の労働者であり、働くことが「生き甲斐」、「誇り」であり休むなどというのは病気が葬式ぐらいなものだと広言してはばからないのです。

昭和41年卒 赤岡 岱

えぬ強い日差しを避けて疲れを癒した。ここから一気に山道を急ぎ、松風山音楽寺へ。臨済宗の札所で、長尾根の頂上に建ち、荒川、市街、武甲山が展望出来る。ゆっくりと休息し、眺望を楽しむのには絶好な場所だ。時間の関係で、すぐに山を下り、野づらを横切って、汗を拭いながら二十番所法王山岩之上堂へ、本尊は気高い聖観音立像で、寄木漆箔で藤原時代の作と言われ、期待していたが工事中のため拝観出来なかった。残^ゝ境内で飲んだ水は格別だった。2キロ程足早に歩くと近代的な橋「秩父橋」、渡りきると町内に入り、飛瀨山竜石寺がある。千手観音像を祭る札所最古の建築構造で、巨石で出来た庭が特徴である。最後に実正山定林寺を拝した。民家の一角に並ぶ小さな寺だが御詠歌が刻まれた梵鐘は、美術品として価値の高いものだと思う。とり急いだ、12.3キロ程度(約4時間半)の巡拝だったが、それぞれの寺の独自の魅力と歴史、柔和でおおらかな石仏、超越的姿態で、慈悲深く、やさしい「まなざし」の観音像、怒号勇ましい姿とは縁遠く、愛嬌たっぷり仁王像と人里との関わりの深さを味合った一日だった。政治、経済、自然、人の心と皆疲れています。皆で一休みしましょう。きっと、すばらしい知恵が生まれます。一休洗心。

(二松学舎大学附属高校)

昭和42年卒 萩野 征治

お陰さまで中大を卒業して現在の会社にお世話になって以来20数年間が過ぎていますが、日々やりがいを持って楽しく仕事をさせて頂いており、周囲からは異常なまなざしで見られていますが、とにかく入社以来、会社を辞めようと思った事が一度もないのです。

また、有給休暇が一年間に30数日あるということは知っていますが、あまり使ったことがないのです。

上智大学のグレゴリー・クラーク教授が「太鼓判？」を押していますが、日本人はこんなものなのです。とにかく身を粉にして働いて、休みになるとわざわざ混雑しているところに出掛けて余暇を楽しんだつもりになって、疲れた、疲れたとって自己満足するのです。

初 体 験

先日はじめて、仲人というものを経験させてもらっ（）。もちろん頼まれ仲人である。会社の従業員の結婚式である。頼む側にしてみれば、勤務先の上司に頼むのは当然であろう。頼まれる側は、初体験である。

結納その他は終っていて、結婚式及び披露宴だけの一般的なものだ。めでたい事だから断わってはいけないものの本に書いてあるので、簡単に受けってしまったから大変だ。とりあえず、「仲人のすべて」なんて云う本を買ってきて読んでみる。もっともだと思われることが書いてある。問題は皆んなが素面しらふに聞いている最初の挨拶だ。初めのきまり文句や二人の紹介はなんとかなるだろう。問題は、はなむけの言葉である。

両家の両親の気持ちは良く分からないし、結婚とはまったく違う生い立ちの人が、結婚の義式が終わると一諸になって新しい家庭を築いていく事である。大変な事である事は自分にもわかる。自分は人に誇れるよ（）な家庭でもなければ、新夫婦に良きアドバイスできるような家庭でもない。考えれば考えるほど難しくなってきた。私には子供が3人いるが、男の子ばかりなので当然新婦側の両親の気持ちというもののがわかるはずがない。よくテレビドラマ等で花嫁の父が取り上

でも、私は「一所懸命」が「一生懸命」に通じると信じており、いま、仕事を精一杯やっていたら、老後も何かに精一杯打ち込めるはずだと信じているのですが、これは開き直りでしょうか？（NEC）

昭和47年卒 菅 原 正 人

げられているが、蝶よ花よと育てた娘を何故の馬の骨かわからない他人に渡さねばならないのだから父親の本心から言えばとんでもないのだろう。

一方新郎側の両親の気持ちは、それこそ昔から嫁と姑というくらいのもので色々あるだろう。まして長男の場合は、たとえ同居しなくても難かしい問題が山積みだろう。そんな事を考えているうちに披露宴の日がきてしまった。仲人の言葉のできいかんでその夫婦の将来が決まるものでもない。二人で培っていくものである。そう思うと難かしく考えないで自分の生き方で大切にしている『人の付き合い』を、はなむけに送ろうと決めて披露宴におもむいた。

人の付き合いは、どんなに細くてもよいから長く付き合いたいと思っている（年賀状のみの付き合いでも十分だ）。夫婦の場合は、運動会の綱の如く太く長くあってほしい。

一生のうちに一度はやりなさいといわれている仲人をとにかく無事終えたとたんに次に頼まれたら今度は何を喋ろうかとすぐに、スケベ心がでてしまう平凡な仲人であった。

（菅原電気事務所）

光 と 影

趣味は？ と聞かれるといろいろあるが、最近凝り出しているのが写真である。

昭和61年卒 野 口 皇 紀

高校生のころからカメラに興味はあったが、値段が高くなかなか手が出せずに、カタログばかり見入っていた。

働きだして多少は、自分の小遣いができるようになり学生のころ夢(?)であった一眼レフをやっと手にした。

初めのころは風景などが中心のカラー写真で、自分の撮った写真を雑誌などに投稿したことはないが友人からの依頼で、一度だけ建設中の東京都庁の写真を撮り、住宅新聞の新年号の一面を飾った事があった。

最近、モノクロ写真に興味を持ち、その中でもスポーツ写真が中心で、野球、バレーボール、マラソンといったものが多く、主に被写体はアマチュアスポーツマン(会社の職場の人が多い)である。

スポーツ写真となると動きも早くシャッターチャンスも難しいが、ファインダーを通して被写体を追い、まるで豹が狙った獲物を追うがごとく決定的瞬間を狙うのである。

ファインダーの中が真っ暗になり(シャッターを切っている時には被写体はフィルムに焼き付く)決定的瞬間を目にしなかった時ほど、現像が楽しみな時はない。

今のカメラは、ほとんどが自動化されていて、カラー写真などは誰が撮ってもきれいに仕上がるが、自分が感じる通りに表現したい写真がDPEまかせで出来るかといえば、必ずしもそうとは言えない。

何を表現したいのかは、手焼きに限るのである。

モノクロ写真は、自分で現像からプリントまで手軽にでき、どこを強調したいのか自分の手で仕上げるからこそ味わえるものがある。

特にモノクロ写真を撮るようになってからは、光と影と使い方を気にするようになった。影ひとつの使い方写真の雰囲気が全く変化してしまうからこそ味わえる面白さであり難しさでもある。そしてこれが芸だとも感じる。

モノクロ写真は、白と黒、つまり光と影の世界であり、今はこれにのめりこんでしまっている。

(日本ケミコン 撰)

“とある音楽ファンのなげき”

1993年夏、言うまでもなくバブル経済崩壊後の不況の真っ只中である。ゴルフ会員券相場の低迷、高級品がさっぱり振るわない百貨店、オフィステナント探しに躍気になっている最中にオープンを迎えたランドマークタワーなど、この手の話題には枚挙のいとまがない。

こと、音楽業界もバブル経済崩壊の影響を深刻に打っている。今年に入ってから、バブル時期に契約された海外一流オケ、歌劇場が次々と日本にやって来ている。本来、音楽ファンにはこの上も無く嬉しいことのはずであるが、実際はそうも言ってはいられない状況になってきているのだ。メセナへの新規参入組がもたらしたチケットの高騰と音楽ファンの意識の変化がその一つである。

今年5月から6月にかけて行なわれた、あるTV局主催のメトロポリタン・オペラの引越公演は、その事自体ビッグニュースである上、ドミンゴ、パヴァロッティ、バトールなどのスター歌手の共演や芸術監督レヴ

平成2年修士卒 細田浩希

ァイン自身の指揮と、極めて豪華な内容となっている。ところが報道によれば、主催者のもくろみに反し、S席5万円という料金体系のチケットがさばらず、招待客を動員せざるを得なかったようで、天井席に陣取った音楽ファンと、一目でそれと分かるS席の招待客との対比が何とも皮肉な状況だったとのことである。

ワーグナーには目がない私が、2年も前から楽しみにしていた、ベルリン・ドイツオペラのワーグナーの題目による引越公演もどうやら同じような運命をたどりそうである。ある麦酒会社が主催するこの公演は、コロ、ジョーンズなどのスター歌手、ゲッツ・フリードリッヒの演出など、メトに迫る豪華な内容である。しかしながら主催者の特別なはからいにより、S席38,000円という料金体系に加え、欧米では通常格安で開放される天井席が3,000円で売り出された。

ご多聞にもれず不況のあおりで苦しい家計を強いられている私は、当然のことながら、一般席の発売に先

立って行われる天井席の抽選に応募、ところが何と定員の20倍もの応募があったそうでええなくはずれ、やむなく“限りなく天井に近い”D席を求めて、一般席発売日に電話予約を試るが、電話がつながったときは既にD席は売切れ、S、A、B、C席なら残っているとのこと、泣く泣くC席を買わざるを得なかった。S席から即売り切れ、となるのがかつての常識だった一流歌劇場の公演がこのような状況とは、音楽ファンの常識も変わったものである。

さて、このベルリン・ドイツオペラの公演、発売日から3ヶ月もたった今でも、こともあろうにJRの電

車のつり広告にチケット発売中のチラシがかかっている。家計に分別のある、天井席の抽選にもれたファンは、あと先を考えない私と違い、一般席のチケットには手を出さなかったようだ。

10月の公演当日、S席に招待されたセンセイ方がお行儀良く楽しんで頂くことをただ祈るのみである。

いや、もっと大事なことを忘れていた。果たして平日の5時に上野のホールへ着けるよう、仕事をうまく抜け出せるか？ しがない音楽ファンにはつくづく困難がつきまとうものだ。

(東芝)

いま思うこと

深井 昌

同窓生の皆さんお元気にお越しのことと思います。来年の3月末で私の満39年にわたる中大電気・電子工学科における生活は終了する。私の有効人生の殆んどを過させて頂いたこの学校に別れを告げるに当っては、いささか感無量の思い無しとしない。今にして思えば、多くの悩み、苦しみ、不満もあったことは確かではあるが、現在唯心に残るのは楽しかった幾多の思い出のみである。奉職したのは、昭和31年4月であるから、第5期生の方々からは、学生実験その他でいろいろと関わりを持ったことになる。同窓会名簿によれば、そ

数7千人余、残念乍らその総ての方々のお顔は覚え切れなかったが、今もご交際を願っている方もあるし鮮かに心に残っている人々も多い。

「山の上」時代に比べれば、学校の建物、研究・実験設備等は全く面目を一新し、飛躍的な進歩をとげて技術革新時代に対応しつつある。一方学生の気質も時代と共にずいぶんと変ってきた。しかしながら自分自身は昔と殆んど変わったとは思えない。勿論、身体は老化し、スタミナは劣化したが、心の状態は30年前と少しも変わっていないようである。これは、いつも若い学生達のお相手を勤めているせいか、周囲の環境の変化が無い為か、もしくは自分の精神年齢が進歩しないた

めかによるものであろう。

とにかく、この40年の理工学部的发展は目覚ましい。電話で「工学部」を「法学部」と聞き違えられた話は昔語りとしても、今は大企業に束になって就職し、就職担当の先生の室の前に各社の採用担当者が順番待ちをする光景が見られる。日本の高度成長の背景があるにしても、母校の発展は、今年退任された吉久先生を最後とする草創期の先生方ならびにそれに続く中堅の先生方の並々ならぬご努力の結晶であることは勿論であるが、何と云っても同窓生諸士の地道な実績の積重ねの賜である。今年は確かに例年に比して就職状況は厳しく、7月末においては未定者もある程度存在したが、わが電気・電子工学科に限ってのみ言えば、M2も学部生も当初の予想ほど悪くはないようである。就職担当の木下・鈴木両先生、指導熱心な市川先生の方ならぬご努力によることは論をまたないが、各企業の先輩リクルーター諸士の卓越したご尽力に改めて感謝と敬意を捧げる次第である。

次に私達の関係している理工学部実験体制について少し述べてみたい。当科の学生実験体制は、時に担当者の一部変動はあったとはいえ、「山の上」の時代からあまり変ることなく今日まで続いて来た。近年、講義

担当の先生方の交替と歩を合せる如く、理工全体としてわれわれ実験担当教員の数が減りはじめ、当科でも来年からは安藤先生と私が定年となる。今まではその穴埋めとして職員系列の技術員の人達が当てられているが、現行の技術員制度は、3年ごとの交替ということもあって永続性に欠け、腰を据えて学生実験の諸問題に取り組むには不適である。学生実験が理工学教育の上でどれ程の比重を占めるかは、人により価値判断が異なるであろうが、実社会に活躍しておられるOBの方々に伺うと、学生実験の経験がいろいろ役立っていると云われる場合が非常に多いのは事実である。客観的にみて、実際に機器類に接し、手に触れ、扱ってみることは昔から重要なことであったと考える。実験体制は一つの組織であるから頭数さえ揃っていればいいようなものであるが、組織を構成するのは人であり、生かすも殺すも人による。まして学生実験はマンツ

マンの教育であり、実験器具操作ひとつをとっても、うまく動かすためにはそれぞれノウハウがあって手をとって教える必要がある場合が多い。従ってベテランが育ちにくい制度では困り、教育上の見地からすれば直接指導にたずさわられる教員が複数居ることが望ましい。

ここ数年のうちには、理工の実験担当教員は急減する。これに対処すべく、いま理工学部では新たな「学生実験体制」作りを急いでいるようである。願わくは現状より退歩することなく、より優れた体制が確立されるよう望んで止まない。

当科にも今や優秀な新しい先生方が次々と着任と国の内外を問わず着々と業績を挙げられつゝある。今から10年後の電気・電子工学科の姿を想うとき、胸の躍動を禁じ得ないものがある。



会 務 雑 感

副 会 長 天 野 浩 志

バブル経済の崩壊と円高による構造不況の下で、景気の良い明るい話題が聞かれなくなった昨今ですが会員の皆様には、この苦しい状況の中でも益々御活躍のことと拝察申し上げます。

昨年度の同窓会総会にて副会長に選任され、会員の皆様の協力を戴き微力ながら同窓会の発展に尽くしていく所存でございます。

現在、会務として主に会員名簿のパソコンによるデータベース化とデータのメンテナンスを担当しております。お陰様で平成3年にはかねてからの念願であった会員名簿を、常任幹事一同の尽力により10年ぶりに

発行することができました。今後も定期的に会員名簿を発行する予定ですが、会員名簿の発行には多大な予算を使いますので多数の皆様には是非とも購入して戴き、財政に御協力をお願いします。

平成5年3月卒業の新入会員を迎えて、現在、会員総数7,083名に達しておりますが、残念ながら消息不明の方々が2,041名おります。今後もデータの正確さを保持するために、住所変更ならびに友人知人で住所の判明しております方がおりましたら、同窓会事務局へのご連絡をして戴きたく会員の皆様の協力をお願い申し上げます。

(昭和39年卒)

常任幹事、学年代表幹事による 第1回合同幹事会開催される

平成5年7月28日(水)理工学部において標記の会議が開催されました。

主として、同窓会規約の見直し、名簿刊行について、検討いたしました。

学年幹事としてご出席いただいた方は次の通りです。

重政 弘康 (S. 35)
山口 功 (S. 40)
戸川 英明 (S. 41)
萩野 征治 (S. 42)
菅原 正人 (S. 47)
高橋信一郎 (S. 62)
細田 浩希 (S. 63)
上野 克彦 (H. 1)



遠藤研究室のスキー合宿

(前左2人目遠藤先生) ▶

常任幹事紹介



志村 公夫 (しむら きみお)
昭和42年卒
中央大学電算センター勤務
同窓会会計担当幹事



岩瀬 暢男 (いわせ のぶお)
昭和43年卒 (1978)
卒業来ずっと東芝に勤務しております。現在は研究開発センターの材料・デバイス研究所に所属。コンピュータハードウェアの高速化研究を行っております。3年ほど前から常任幹事として微力を注ぐこととなりました。



戸川 英明 (とがわひであき)
昭和41年卒
旭光学工業勤務

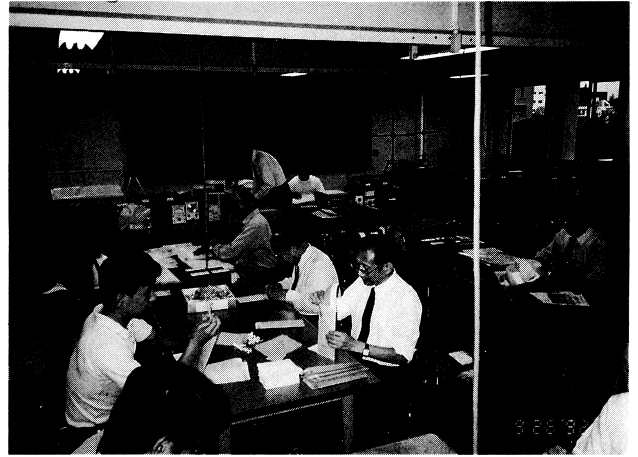
◀ 最終講義をされる吉久先生





◀ 常任幹事会

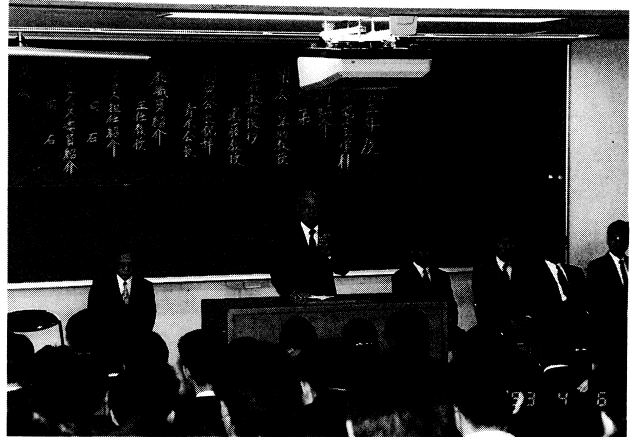
総会案内状発送準備作業をする
常任幹事のみなさん ▶



◀ 卒業式



◀ 卒業証書を渡す遠藤先生



入学式・学科紹介で祝辞をのべる
青木会長 ▶

▼ 入学式（あいさつは遠藤先生）



記 事

今年4月入学時に入会された会員は次の方々です。
(12名)

折 山 治	浦 康 一
渡 辺 健一朗	庄 司 健
田 中 亮	津 嶋 照 久
末 永 十 一	小久保 弘 之
小 林 昭 弘	大 瀧 基 嗣
野 瀬 尊 之	石 井 進 也



▲ 受付けを手伝う深井先生（右）

平成3年度 会計報告

収入の部

前年度よりの繰越金	4,725,937 円
平成3年度総会会費	467,000 円
預貯金利息	163,007 円
名簿売上代金	476,000 円
終身会費	808,000 円
寄附金	5,000 円
広告料	60,000 円

計 6,704,944 円

支出の部

平成3年度総会費	396,859 円
通信及び印刷費	906,004 円
アルバイト代	57,401 円
事務・運営費	157,970 円
名簿関係 印刷費	762,200 円
通信費	58,580 円
アルバイト代	2,580 円
事務費	50,000 円
慶弔費	10,300 円
記念事業費	159,000 円
次年度繰越金	4,144,050 円

計 6,704,944 円

上記、平成3年度会計報告の収支計算は、適正に表示しているものと認める。

平成4年10月29日

弁理士 服部修一

入 会 申 込 書

平成 年 月 日

同 窓 会 長 殿

昭和
平成

年卒業

㊟

私は終身会費 10,000 円を添えて
入会を申し込みます。

編 集 後 記

総会、懇親会は10月30日、大勢の会員のご
出席を期待するとともに入会されていないみ
なさんの入会を待っています。

世の中の動向も大変ですが会誌に原稿をお
寄せ下さることを大いに期待しています。

発 行

〒112 東京都文京区春日1-13-27

電 話 03-3817-1862

FAX 03-3817-1847

発行人 青 木 義 雄

編集人 市 川 友 之

印刷所 エース工芸株式会社

〒354 埼玉県富士見市鶴馬2589

電話 0492(51)1305



仕事に役立つ専門情報を提供する、

日経BP社

経済、機械、コンピュータ、エレクトロニクス、建築、土木、不動産、デザイン、医療、ニューサービスなどの専門情報をお届けする、「日経BP社」。31の専門誌をはじめ、ニューズレター、情報ファイル、書籍などを発行し、仕事に役立つ専門情報を提供しています。

日経アーキテクチュア
NIKKEI ARCHITECTURE

たっけい
デザイン
NIKKEI DESIGN

日経コンストラクション
NIKKEI CONSTRUCTION

●これらの雑誌は書店ではお求めになれません。●年間予約購読●直接郵送制。

日経BP社
データセンター

〒102 東京都千代田区平河町2-7-6

購読お申し込みはお電話でどうぞ。
読者サービスセンター

☎ (03) 5696-1111 (月～金 9:00～17:00)

平成5年度 総会、懇親会開催のお知らせ

中央大学理工学部電気・電子工学科
同窓会々長 青木 義雄

秋も深まり涼しい季節を迎え会員みなさまにおかれましては、いよいよご健勝にてご活躍のこととおよろこび申し上げます。

さて、本年度の総会、懇親会を次のように開催いたしますので、ご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

開催日	平成5年10月30日(土) 15時～18時
会場	南国酒家(なんごくしゅか) TEL 03-3400-0031 JR山手線、原宿駅(明治神宮側出口)1分 地下鉄千代田線、明治神宮前駅(株コクド側出口)0分
会費	8,000円 平成5年学部卒業生、ご家族(同伴者)は5,000円
議事	平成4年度活動報告、懇親会
お願い	お返事は、同封のハガキにより10月15日までにご投函下さるようお願い申し上げます。